

(様式 1)

令和6・7・8年度「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」
学校改善プラン(2年次)【小学校】

【学校名等】

学校名	城陽市立今池小学校							校長名	柳 宗一郎
学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援	児童数	3 0 6 名
学級数	2	2	2	2	2	2	5		
事業担当教員名	藪内 達也								
① 中学校区で目指す子ども像	・互いに認め合い、自ら考え行動する 自ら考え学び合う子 ・人と人とのつながりを大事にし、お互いを思いやりながら高め合える関係性を築き、社会の中で生きる力をもった子 これまで中学校ブロックで研究を進めてきた「学び合い」を軸に ICT 機器を活用して、「自分で考える力」「自分で学ぶ力」をさらに育んでいきたい。								
② 目指す子ども像	【よく考える子】 ・自ら課題を見つけ、これまでに学んだ知識を活かして、問題や課題を解決できる。 ・自分の思いや考えを表現したり、相手に伝えたりすることができる。 ・様々なことに興味を持ち、自ら調べたり、考えたりすることができる。 ・学びに対して主体的に取り組み、自ら学びを広げることができる。 【助け合う子】 ・「思いやり」と「感謝」の気持ちを大切に、他者と関わりを持つことができる。 ・友達のよいところを見つけ、互いに認め合うことができる。 ・困っている人がいたら、手を差し伸べることができる。 ・友達の思いや考えを尊重できる。 【体をきたえる子】 ・規則正しい生活習慣を身につけ、健康に気をつけて生活できる。 ・運動の命を大切に、安全に気をつけて生活できる。 ・運動を通して、たくましい体や心をつくる。								
③ 目指す子ども像に対する現状と課題	・基本的な生活習慣を身に付ける。 △朝ごはんを食べて来ていない児童が 10%以上いる。 △ゲーム・テレビ・YouTube・スマホの利用時間が長い児童が多い ・90%近い児童が、学校は楽しいと回答している一方で、学校や学級にうまくなじめなかったり、なんとなく学校を楽しめなかったりといった要因で不登校傾向の児童の割合が増えてきている。 ・休み時間に外で遊ぶ児童が多い。 ・教師に対して関わりを求めてくる児童が多い。 ・授業中は、規律を守り落ち着いた雰囲気の中で学習に向かうことができ、決まった課題に対しては前向きに取り組むことができる。一方で、自分で課題を見つけたり、学習と生活を結びつけたりする力が弱い。 ・自分で考えて行動することや新しいことに挑戦することに対して、苦手意識のある児童が多い。（具体的に指示されなければ、何をしたらよいのかわからない） →これまでの知識や経験を活用し、アウトプットする力の弱さが見られる。 ・基礎学力の定着が難しい。 △家庭での学習習慣が定着していない児童が多い。課題をやりきる力が弱い児童が学級に複数いる。 ・異年齢集団の縦割り班(スマイル班活動)での取り組みを楽しみにしている児童が多い。 ・世の中の出来事やニュースを知らなかったり、興味が持てなかったりする児童が多い。 △語彙力が乏しい。								

④ 目指す子ども像に達するための仮説	研究仮説 「探究的な学びを積み重ねることで、子ども達は非認知能力の伸びを実感するのか」 (1) 心理的安全性 ・コミュニケーション力が高まると、生徒指導事象は減少するのか ・コミュニケーション力が高まると、高学年も異年齢集団活動を楽しめるのか ・自分のことをふりかえる力を高めると、学習意欲やコミュニケーション力に変化が見られるのか ・教師の心理的安全性が高まると子ども達の心理的安全性も高まるのか (2) 好奇心・精緻化 ・探究的な学びは子供達の好奇心を刺激するのか。(学びのパスポートより) ・好奇心が高まると学力に変化は見られるのか。(標準学力調査より) ・総合的な学習で探究活動を取り入れ、他者と関わる力を高めることは、他の教科の学び方や学習への考え方に影響を与えるのか。(国語：話す・聞く・書くなど)(算数：活用など) ・多様な学習方法を指導し、自分で学習方法を選択する経験を積み重ねると、他教科でも学び方は変わるのか(学習方法：精緻化) ・総合的な学習で思考ツールなど、さまざまな思考の整理の仕方を学び、自分の意思で使えるようになると自分の意見を表現する力は上がるのか 【仮説を検証する手段・方法】 □ 学びのパスポート 4～6年 (令和6年5月→ 令和7年5月 結果の変化を追う) □ 1～3年生 非認知能力及び学習方法調査アンケート (7月) 生活リズム点検(5月・9月) □ 学びのパスポート分析(7・8月) □ 学びのパスポートの分析に基づく各学級の実践と修正 (9月～3月 ロイロノートを使ってかんたん振り返りを行う) 児童アンケート(11月) □ 標準学力調査 (12月)標準学力調査分析(2月) 心理的安全性、好奇心・精緻化を見取る調査アンケート(3月) □ 全学年 非認知能力及び学習方法調査・来年度に向けての改善プランの見直し(3月)
---------------------------	--

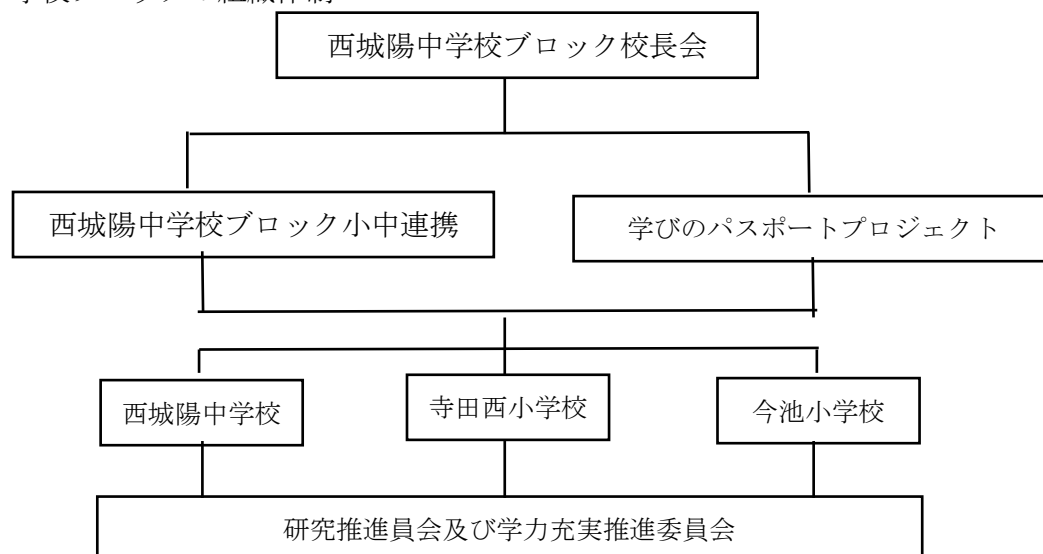
令和7年4月1日現在

【1 研究主題】

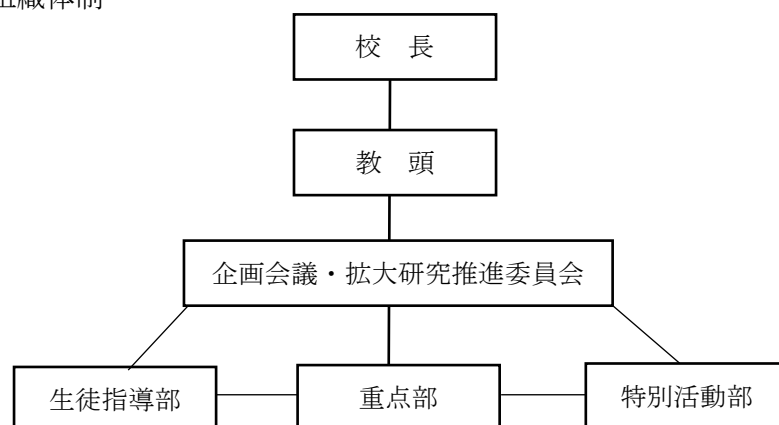
個が輝き、たくましく生きる力の育成
～やってみたい！をやってみよう！～

【2 研究組織体制】

1) 中学校ブロックの組織体制



(2) 校内の組織体制



【3 具体的な取組内容】

◎コミュニケーションをベースに置いた探究学習

→他者との関わりを大切にした授業作り・学習活動

→子ども達の興味・関心を惹き付ける導入・教材の工夫

→子ども達の「もっと知りたい」、「調べてみたい」をベースに置いた学習活動

【夏休み】 教材研究会の実施、探究の視点を踏まえた単元づくりの研修

【1学期】 探究の視点を取り入れた授業の紹介（職員に向けた重点部だより）

【通年】 探究の視点を踏まえた取組の紹介、研究授業のポイントや見る視点の共通理解（研究推進だより）

◎教室や学校での【心理的安全性】の確保

→児童が自分の考えや気持ちを安心して発言・発表できる環境づくり

【通年】 三部との連携（ブロック会議での児童理解・要支援児童の共通理解）

【11月】 児童アンケート実施・分析・共有

【夏休み】 学びのパスポート分析・発表会（児童理解）

【2月】 標準学力調査分析・来年度への引き継ぎ資料づくり、交流会

◎個別最適な学びと協働的な学びの一体化

→指導方法・教材の工夫

→一人一人に応じた学習活動や課題に取り組む機会の提供（ICTの効果的な活用）

→発表や話し合い活動、協働での意見整理、リーフレット・ポスター作成などの協働作業

◎自分の考えをしっかりと伝える力を育むための授業改善

→交流する時間の工夫：考えを「伝え」「比べ」「深める」

◎めあてとふりかえりを大切にした授業づくり

→自分の言葉で振り返らせることで、本時の学びの確認と意欲付けを図る。

◎基礎的・基本的な学力の定着に向けた取組

→朝読書・eタイムを含む朝学習の取組、学びタイム・学力補充の実施、自主学習ノートを含む家庭学習の習慣化

【4 仮説及び成果を検証するための質問項目】

学年	質問番号	質問項目	概念	備考
1～6	59	普段の生活の中で、自分の考えを自由に話すことができる。	心理的安全性	中学校ブロック共通
1・2	37	新しいことに取り組むときはわくわくする	好奇心	研究主題に関わる

3～6	72	学習するときは、教科書以外にも辞書・図鑑・参考書・プリントなど色々なものを参考にして情報を集めている。	精緻化	研究主題に関わる
-----	----	---	-----	----------

* 5、6の分析項目は削除しています。

【7 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】

◎個に応じた具体的な指導・支援方法

①6-A、6-B

学力が低くないが、アウトプットが苦手な児童であるため、安心して自分の考えを伝えることができる場の設定が必要である。

②6-C

何がわかっていて、何がわからないのかを一緒に整理してあげる必要がある。学ぶことの楽しさを感じられると、学習することの定着につながるのでは。

③5-D

学習の中で友達の意見を聞いたり、共有したりする場面を増やすことで学級の友達とのつながりを作っていきたい。

④5-E

通級指導教室や個別の取り出し学習を行い、本人の学習へのハードルを少しでも下げたい。わかることの楽しさや喜びを実感させたい。

⑤4-F

個別に学習支援を行い、課題のやり残しをなくすことで、安心して学習に臨める環境を作りたい。

⑥4-G

通級指導教室や個別の取り出し学習を行い、ハードルを下げることで、本人の学習することへの抵抗感を少しでも下げたい。わかることの楽しさや喜びを実感させたい。

何を指導するにも、何を支援するにも「個別の児童理解」が必要となる。

そして、その見取りは、担任1人の視点よりも学年やブロックなど多方面の視点の方が良い。

本校では4月に、年度末を見据えた目標シートを作成している。また、生徒指導事象などは月毎にログを貯めるシステムを今年度から採用している。子供のことを話す時間を物理的に、且つ強制的に設定することで、多くの教員が支援の必要な児童に関する情報を共有できるようにしていきたい。

また、一度作ったシートを再構成、追記していく活動を通して、実践や関わりを振り返り、アップデートしていく機会を設けていく。担任だけでなくチームとして一人一人の児童と関われる学校に、学校としてもアップデートしていきたい。

◎集団としての具体的な指導・支援方法

ここ数年、本校の学力が向上しているのは、学校全体で学力の向上に向けて行ってきた取組の結果であると考えられる。朝学習のeタイム、3年生以上の学びタイムを問題の作成から足並みをそろえて行っている。これらの取組に関しては効果が出た取組と位置付けて継続して実施していきたい。

一方で気になるデータとしては「学校が楽しい」と答える児童の割合が年々緩やかに下降していることである。反比例するように少しずつ不登校や登校しぶりの割合が増えている。

本校の欠席が多い児童は、「なんとなくいきたくない」「理由がわからない」のほかに、家事都合など、家庭環境に起因する場合がたくさんある。その結果子供がリズムを崩し、だんだんと登校が難しくなるケースも多い。子供への支援の他に、家庭への支援が必要である。

校内委員会、教育相談部会、生徒指導部、保健室運営、管理職など、複数の機関が状況を把握し、遅すぎないうちに変化を掴み、適切なタイミングで行動を起こしていくことが必要である。変化を掴めるよう職員同士の風通しは今後も大切にしていきたい。

①6年生

基礎学力の定着→反復学習

授業の中で、「自分の意見を持つ」、「わからないときは分からない自分を自覚する」ことを大切にしたい。わからないままで放っておくのではなく、授業の終わりには「わかった!」と嬉しく達成感を持って、終わる姿を価値づけ、広めていく。

②5年生

基礎学力の定着→反復学習

6年生になったときの自分たちをイメージしながら、高学年としてどのような姿になりたいかを考えられるようにしていきたい。これまでの学習で学んだこと、体験を通して身に付けたことなど、自分たちの持つ力を学校の様々な場面で発揮できるようにしたい。また、授業中に自分の考えを近くの友達と交流する場面を意図的に設けることで、自分の意見や考えを整理して言葉にする機会を増やしたい。

③4年生

基礎学力の定着→反復学習

小集団での学習や話し合い活動を大事にしていきたい。また、教え合うことで理解を深めたりできたことをみんなで共有していきたい。

【8 仮説の修正】

年度はじめにたくさんの仮説を記入した。その中から、心理的安全性と学力、好奇心、精緻化の関係については8月の分析により、結果が見え始めた。

引き続き、「探究的な学びで子ども達は変わるのか」という研究仮説で取り組んでいきたい。学校全体で、探究的な学びの活動を様々な学習の中で取り入れていくことを共有することで、子ども達が自発的に興味を持ち、問いを立て、実践していくという力を付けていけるようにしたい。

また、本校がこれまで大切にしてきた「コミュニケーション・つながる力」、「思いやりと感謝」についても引き続き、学校全体で共有していきたい。

【9 具体的な取組内容の修正】

【探究的な学びを学校全体で充実させていくために】

- ・ペア活動、グループ活動、個人の調べ学習など一つ一つの学習活動のねらいを明確にする。適切な課題を設定し、課題をステップアップしながら、さらなる問題の解決を始めるといった学習活動を繰り返すことで、子ども達の好奇心や意欲の向上につなげる。

- ・学習の振り返りの重視。→振り返りを通じて学んだことや学び方を自覚させる。自分が学んだことは何か、さらに学びたいことは何かを自分の言葉で、自分の伝え方で表す。

- ・探究活動を通しての変化の見取りをどのように見取るのか、さらに具体化する必要がある。拡大研究推進部を中心にさらに練り上げていく。

- ・精緻化と学力の関係をさらに調べるべく、秋の研究授業では「振り返り」の活動を全校で統一して行う。質の高い振り返りをかける児童(メタ認知力が高い児童)は、どのような学校生活を送り、他に何の要素で好意的な回答を行なっているのかを追って確かめてみたい。

【10 児童の変容（普段の様子から）】

心理的安全性については、全学年、概ね高い傾向が見られた。

4年：2.85 5年：2.81 6年：3.06

※本校が独自で行っている非認知のアンケートでも1～3年生の85%以上の児童が学校生活を楽しく送れていると回答している。

学校全体で探究的な学習を進めていく中で、子ども達の「好奇心」と「学びの深まり」がどのように変化したのかを確かめた。(※6年対象 ロイロノートのアンケート)95%の児童が、興味を持って、わくわくしながら学習するほうが、賢くなると捉えていることがわかった。また、90%近くの児童がこれまで学習したり、経験したりしたことを活かして、いろいろな角度から精緻化を働かせ、物事を考えることが大切だと感じていることがわかった。探究的な学びを学校で進めていく中で、変容が見られる学年も出てきた。

・好奇心 3.35→3.49 ・精緻化：2.75→3.16

【成果】

- ・児童の主体性と挑戦意欲の向上

「やってみたい」という気持ちを尊重し、試行錯誤できる場を設けることで、児童自ら課題に取り組む姿が増えた。

- ・協働的な学びの促進

グループ活動や対話を通じて、児童同士が互いの考えを共有し、学び合う場面が増えた。

【課題】

- ・授業の精緻化の不十分さ

活動が盛り上がっても、思考の深まりや振り返りが弱い場面があった。

- ・ICT活用の限定性

調べ学習や発表活動での活用が限定的であり、好奇心をさらに引き出すための工夫が必要。

- ・児童の理解度差への対応

「やってみたい」を実現する過程で、学習差が広がる傾向があり、個別支援の工夫が求められる。

本年度の研究を通じて、児童の「やってみたい」を尊重し、それを「やってみよう」に変える授業づくりの重要性が再確認された。今後は、精緻化と好奇心の育成を軸に、授業デザインの改善と教材研究をさらに進めることで、児童の主体的・探究的な学びを一層充実させたい。

【11 3年次の研究構想】

来年度も引き続き、西城陽中ブロックで心理的安全性を見取っていききたい。来年度はさらに、心理的安全性に加えて、自己調整にも着目し、子ども達の好奇心、精緻化にどのようにつながっていくのかを考えていきたい。また、学校全体で“つながり・コミュニケーション”“思いやりと感謝”というこれまで本校で大切にしてきたものを意識していきたい。来年度以降も「個が輝き、たくましく生きる子どもの育成～やってみたい！をやってみよう！」という研究主題のもと、府小研の健康安全教育の研究を進めていくうえで、子どもが自分の思いや考えを大切にし、主体的に挑戦する姿を育成することを目指していきたい。

【研究活動の重点目標】

- ・子どもの「やってみたい」を尊重し、主体的な挑戦を促す授業づくりを行う。

→子どもが安心して試行錯誤できる環境を整え、失敗を恐れず挑戦する姿を育成する。

(心理的安全性)

- ・学びの精緻化を図り、思考を深める指導を行う。

→子どもが自分の考えを整理し、広げ、結び付ける活動を通して、よりよい解決策を見いだす力を育成する。

(精緻化)

- ・好奇心を引き出し、探究心を育む学習環境を整える。

→子どもが未知への興味をもとに学びを広げる場を意図的に設計し、学び続ける力を育成する。

(好奇心)